慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	人見絹枝と日本のオリンピック・ムーブメントの発展
Sub Title	Kinue Hitomi and the development of the Olympic movement in Japan
Author	本間, 周子(Honma, Shuko)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1989
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.29, No.1 (1989. 12) ,p.1- 11
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00290001-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人見絹枝と日本のオリンピック・ムーブメントの発展

本　間　周　子*

Ⅰ. 問題の提起
Ⅱ. 研究の視点
Ⅲ. 人見絹枝の競技生活とオリンピック大会参加
Ⅳ. 日本のオリンピック・ムーブメントに対する貢献
Ⅴ. 結　　語

Ⅰ. 問題の提起

本研究の目的は，日本女子スポーツ界の陸上競技における先駆者となった人見絹枝（1907—1931）が日本のオリンピック・ムーブメントに対していかなる貢献を行ったのかを明らかにすることにある。彼女は日本人女性として初めてオリンピック大会（1912年のアムステルダム・オリンピック大会）に参加し，800メートル競走で2位に入賞し，銀メダルを獲得するという画期的な偉業を成し遂げた選手であったが，日本における女子スポーツの先駆者の故に彼女には大きなプレッシャーがかかった。そのため，彼女は過労によって病に倒れ，24才の若さで生涯を閉じることとなった。このことは，日本近代スポーツ史の上では周知の事実であり，これまでも折りにふれて取り上げられてきたところである。

人見が活躍した当時のマスコミは，国内外における競技会での活躍振りをしばしば報道した。彼女が大きな大会で挙げた素晴らしい成績は，当時の人々の注目を集めただけでなく，その後の時代の人々によってもよく語り継がれてきたところである。実際，日本スポーツ史[(1)(2)]・近代オリンピック史[(3)]・陸上競技史[(4)]・日本体育史[(5)]などに関して書かれた多くの著書や論稿において，彼女の業績がこれまでとりあげられてきている。

しかしながら，彼女の業績を歴史研究としてとりあげた場合，そうした研究が極めて少ないだけでなく[(6)]，彼女が日本のオリンピック・ムーブメントに対して如何なる貢献をなしたかという点について，ほとんど皆無だといって差し支えない。とくに，後者に関してはオリンピック

＊　慶應義塾大学体育研究所教授

は巨大化し，国際社会はもちろん国内においても非常に大きな影響力をもつようになってきている今日，ますますオリンピックの理想を追求することの重要性が高まってきている。そのためには，これまでのオリンピックの歴史においてオリンピック・ムーブメントがどのような道を歩んできたのか，そこには如何なる問題があり，またどのように解決されてきたのか，といったことを明らかにすることが必要となっている。

このオリンピック・ムーブメントの推進に関する研究としては，さまざまな観点から考察しなければならないが，その中でもオリンピック競技大会に参加したオリンピック選手自身が行った貢献について検討することは，一つのとりわけ重要な研究課題であると考えられる。その際，オリンピックに参加した選手個人がその大会に参加して活躍したという事実とその影響というだけでなく，その選手の生涯を通じてオリンピック・ムーブメントにどのような関わりをもったのか，それに対していかなる貢献を果たしたことになるのかをも明らかにすることが必要である。

本研究は以上のような考え方に立って日本人女性としては最初のオリンピック選手となった人見絹枝を取り上げて，日本のオリンピック・ムーブメントの発展に対して彼女が如何なる貢献を行ったかを考察し，その意義を明らかにしようとするものである。

II. 研 究 の 視 点

これまでオリンピック・ムーブメントという言葉を自明のことのように使ってきたのであるが，ここでオリンピック競技大会との関係において，このオリンピック・ムーブメントという言葉の意味を明らかにしておきたい。

この点で参考になるのが，国際オリンピック・アカデミー（The International Olympic Academy）において討議した結果得られた一つの定義[(7)]である。それによると，オリンピック・ムーブメントを「オリンピックの理想を普及するためにとられる手段の全体」と規定している。そこでは同時にまたオリンピック競技大会についても，「オリンピックの理想およびオリンピック・ムーブメントの具体的な表現」というように規定しているのである。

これらの規定によってみるとき，オリンピック競技大会とオリンピック・ムーブメントとの関係が明瞭になる。すなわち，オリンピック競技大会はオリンピックの理想を普及するというオリンピック・ムーブメントの一つの重要な手段であるが，その全てではないというようにとらえることができる。

このようにみるとき，どのようなオリンピック競技大会が開かれたのか，オリンピック競技大会の内外において選手のいかなる活躍があったのか，また，それらの大会や選手の活躍に関

してどのような報道や啓蒙がなされたのか，そしてそれらはそれぞれの国家や社会にどのような影響を及ぼしたのか，こういった事実を丹念に明らかにしていくことが，オリンピックのあるべき姿を追求しオリンピック・ムーブメントの歩みを振り返って，その成果を正しく評価していくことが重要であるということが一層よく理解されることと思う。

以下においては，オリンピック・ムーブメントについての人見絹枝選手の業績を考察するものである。したがって，それはオリンピック競技大会における選手の活躍を記録し，明らかにしただけの，単なるオリンピック競技史でもなければ，また同じような意味での単なる陸上競技史でもない。ここでは，あくまでも人見絹枝選手の活躍をオリンピック・ムーブメント発展に対していかなる貢献をしたのか，という観点から検討しようとするものである。

Ⅲ. 人見絹枝の競技生活とオリンピック大会参加

人見絹枝選手のオリンピック・ムーブメントに対する貢献を明らかにするということは，単に彼女がオリンピック競技大会で活躍したことを顕彰すれば足りるということではない。彼女がいつ，どのようにしてスポーツとかかわり，いかなる競技生活を送り，またどのようにしてオリンピック競技大会に参加し，そこでいかなる成績を挙げえたか，これらについてはすでによく知られていることではあるが，ここで一応取り上げておく必要がある。(8)

（1） 学校時代とスポーツ経験

人見絹枝は，1907年岡山市郊外の福波村に生まれた。父親は，農業を営み，決して楽でない生活であったが，1920（大正9）年彼女を岡山県立高等女学校に入学させた。当時は，日本の若い女性の間で，とくに高等女学校や女子師範学校の生徒たちの間でスポーツを行うことが広がり始めていた時期である。この高等女学校生活の開始が彼女のスポーツ経験の開始ともなったのである。

人見が入学した岡山県立高等女学校でも他の高等女学校や女子師範学校などと同様にテニス熱が起こっていて，人見もたちまちこれにとらわれた。そして2年生のときには，はやくも学校代表の選手に選ばれるほどになっていた。

けれども，4年生になったとき，これまでテニス選手として活躍してきた彼女がにわかに陸上競技の代表選手に選ばれ，岡山県中等学校陸上競技大会に出場し，走り幅跳びで一躍一位になったのである。成績は，4m67の新記録であったが，その当時はまだそれが公表されることがなかった。

こうした競技生活を送ってきた彼女は，1924年岡山高女の校長の勧めにより二階堂女塾に入

学し，さらに競技生活に深く関わることになってゆくのである。この二階堂女塾の学生のとき，第5回岡山県陸上競技大会に出場して，三段跳びで10m33をだして，世界記録を破ったのである。

1925年二階堂女塾を卒業すると，彼女は京都府立第一高等女学校の体操教員として赴任した。ここでも彼女は放課後生徒たちのバレーボールやバスケットボールを指導した後，走り幅跳び，三段跳び，槍投げなどの練習を行っていた。しかしながら，間もなく母校の二階堂女塾の助手として戻り，母校の専門学校昇格の仕事を手伝うことになったのである。

（2） 国際女子競技のパイオニア

1926年二階堂女塾の専門学校昇格が実現するや，人見は大阪毎日新聞社の記者になったが，このため彼女は練習したり，また内外の競技会に出場するための時間がとれるようになった。こうして競技生活を続けることができ，それが第3回日本女子オリンピック大会での好成績になってあらわれた。これによって，彼女は1926年スウェーデンのエーテボリで開かれた，いわゆる第2回万国女子オリンピック大会（International Ladies Games）に派遣されることになったのである。そこで次のような素晴らしい成績を収め，特別に名誉賞も受賞した。(9)

100ヤード競走	12'0	3位
走幅跳び	5m55	1位
立幅跳び	2m49	1位
円盤投げ	33m62	2位
個人総合得点	15点	1位

これらの好成績によって彼女は一躍世界的に有名な女子選手として脚光をあびることとなった。そのため，帰国後は新聞記者としての自分の仕事を果たすとともに競技に備えてのトレーニングを続けながら，万国女子オリンピック大会について筆をとったり，講演を行うなど，大変忙しい生活を送ることとなったのである。そのような忙しい中でも彼女は新記録を出し続け，そしてついに，1928年アムステルダム・オリンピック大会の日本選手団の一員に選ばれるという快挙をなしとげたのである。これは，日本人女性としては初めてのオリンピック出場であった。アムステルダム・オリンピック大会では，必勝を期してレースに臨んだ100m競走は準決勝で敗れ，深い挫折感にとらわれたのであるが，すぐにそれから立ち直り，その二日後にはこれまで一度も走ったことのない800m競走予選に出場し，予選を通過した。そして，その翌日行われた決勝では見事2位に入賞したのである。(10) こうして，日本女性として最初のオリンピック出場者であった彼女は，最初の銀メダル獲得者となったのである。このため，帰国後は当然今までより一層忙しい毎日を送ることとなった。

しかしながら，そうした忙しい中でも，彼女はトレーニングを続け，国内・外の競技大会に出場していったのである。その上，彼女はまた彼女の後を継ぐ若い女性たちのトレーニングの指導を続けたのである。[11] しかし，残念なことに，プラハで開かれた，いわゆる第3回万国女子オリンピック大会（正式には Women's World Games と改められていた）が彼女の参加した最後の大会となったのである。この大会では，一緒に参加した日本の女子のふるわない中，孤軍奮闘して走幅跳びに5m90の記録をだし，また個人総合得点も13点を挙げた。[12] しかし，これまでの数年間無理を重ねてきたことによる過労の結果，彼女の健康は知らず知らずのうちにひどく蝕まれていた。彼女がプラハの大会から帰国したときは，すでに健康状態が大変悪化していたため，大阪帝国大学付属病院に入院して治療を受けることになった。そして，1931年8月2日彼女はついに不帰の客となったのである。[13] この悲しむべき彼女のよう折の知らせは，多くの日本人に衝撃を与えた。[14]

Ⅳ. 日本のオリンピック・ムーブメントに対する貢献

以上に述べた諸点を前提として，人見絹枝が日本のオリンピック・ムーブメントに対して如何なる貢献をおこなったかを明らかにしなければならない。さきにオリンピック・ムーブメントについて，「オリンピックの理想を普及するために用いられる手段の全体」であるとする定義があることを述べておいたが，この点にたち戻って考えると，オリンピック・ムーブメントを推進するためにとられる方法には，さまざまなものがあることが理解されよう。けれども，ここでは「オリンピックの理想」ということが重要な概念としてとらえられなければならない。そしてまた，「オリンピックの理想は，道徳教育や体育と融合しようとする試みが大切である」[15] といわれていることも重要である。この点に関してつけ加えるならば，ＩＯＣのオリンピズムの定義においても「オリンピズムとは一つの総合的な人生哲学であって，身体，意志および精神の諸属性をバランスのとれた一つの全体に高め，結びつけるものである」[16] とされている。いま，人見絹枝が日本のオリンピック・ムーブメントに対しておこなった貢献を考察する際に，これらの概念が役立つものと考えられる。

こうした観点に立って行った分析の結果は，次のように要約されよう。

（1） オリンピック選手としての活躍

この点はすでに明らかのようであるが，オリンピック・ムーブメントへの貢献という観点からあらためて検討しておく必要がある。さきに述べたように彼女は1928年のアムステルダム・オリンピック大会に日本人女性として初めてただ一人参加して，銀メダルを獲得したわけであ

る。オリンピック競技大会は，本来オリンピックの理想を普及・宣伝するための主要な最大の手段といえるわけであるから，オリンピック大会に参加して活躍したこと自体がオリンピック・ムーブメントに対する大きな貢献であったことはいうまでもない。しかも彼女の場合，男性に対してはいうまでもなく，女性に対して自分たち女性の持っている可能性を大いに示し，日本の女性のために近代オリンピックへの扉を開いたという意味において特に重要な貢献を行ったものと考えられる。事実，その後の1932年に開催されたロサンゼルス・オリンピック大会に参加した日本人女性は，一挙16人にのぼったのである。[17] これは大変急激な増加であって，それは一般的に女性の間にスポーツが普及していく気運が高まってきていたという事実があったが，やはりパイオニアである人見によってはじめて日本人女性にオリンピック大会参加の扉が開かれ，これによって勇気づけられたところが大きかったからだと考えられるのである。

この選手としての貢献という点に関しては，彼女の功績が単にアムステルダム・オリンピック大会に参加し，オリンピック選手として貢献したことだという評価だけでは十分ではない。その当時日本の国内および国外でさまざまな種類の，いわゆるオリンピック大会と称するものが開かれていたのである。すなわち，国際女子オリンピック大会(世界女子競技大会)，日本女子オリンピック大会，日本学童オリンピック大会，山陰オリンピック大会（地方)，徳島県オリンピック大会(地方）などである。[18] 人見絹枝は，その中でも国際女子オリンピック大会や日本女子オリンピック大会などの，正式の国際オリンピック大会とは別の，オリンピック大会と称した各種大会にも参加していたのである。それも，自分の参加が日本の女子スポーツの発達に役立つものと確信していたからであろう。事実，こうしたところでの彼女の活躍は，新聞等でも大々的に報道され，また帰国後には各地で講演活動も行ったりしていたので，彼女の活動は全体的にみて日本の女子のスポーツ活動の活発化に貢献したのであって，その結果オリンピック大会への日本人女性の参加を増加させるのに大きく貢献したとみることができるのである。

この点に関連していうならば，国際オリンピック委員会はその後，国際オリンピック大会以外のオリンピック大会という名称の使用を禁止することになる。[19] たしかに，そうした各種のいわゆるオリンピック大会は新聞社の公報活動と深い関わりを持っていたことも否定できないが，それでもなおそれらは「オリンピック」という名称への親愛感をつくりだし，一般的に広くスポーツを奨励するような気運をたかめていった側面も正しく評価すべきであろう。

（2） 日本人女子選手のリーダーとしての活躍

人見は，単にオリンピック選手であったばかりでなく，日本の女子陸上競技選手のリーダーでもあった。第一に見られるのは，1929年に奈良県美吉野運動場における女子選手の合宿を計画し，実行したことである。これは，日本で最初の女子選手の合宿トレーニングだったといわ

れるものである。[20] 岡山，京都，大阪，東京，和歌山，静岡等から15名の選手を集めて2週間にわたって行ったこの合宿で，彼女は自らのトレーニングに励みながら，後輩選手の世話もしたのである。1930年第3回世界女子競技大会が行われる前にも，やはり参加選手の合宿をおこなったのである。このときも，彼女はまた積極的な役割を果たしている。そして，この第3回世界女子競技大会期間中に彼女が日本選手団のためにリーダーとしての役割を十分果たしたことはいうまでもない。こうして彼女は女子陸上界の先輩選手として，またリーダーとして活躍したことは，日本の女子陸上界のレベル・アップにつながり，その結果が事実として第3回世界女子競技大会（後に国際女子オリンピック大会と改称）参加選手の中から渡辺すみ子，村岡美枝，中西みち等の選手がロサンゼルスの第10回国際オリンピック競技大会参加という形で実を結んだのであった。この意味においても人見のオリンピック・ムーブメントへの貢献を評価しなければならない。[21]

第二に，人見は現役選手として競技大会に出場するとともに後輩選手の指導をするにとどまらず，彼女が勤める大阪毎日新聞社には，彼女を指導した木下東作博士を会長とする日本女子スポーツ連盟の事務所が置かれ，彼女はこの連盟の事務の仕事にも携わったのである。このため，彼女はまたこの連盟の理事会にも出席して活動しており，その責任を果たすと共に第3回世界女子競技大会に対して日本女子陸上競技選手を派遣するための費用調達の募金活動にも献身的に働いたのである。[22] この日本女子スポーツ連盟が日本の女子陸上競技の発展に尽くした功績，ひいては日本のオリンピック・ムーブメントの進展にもつながったことの意義は極めて大きい。

（3） 著書・論文による啓蒙活動

人見は，当時の日本の有力新聞であった大阪毎日新聞の新聞記者だったので，しばしば新聞や雑誌に記事や論文を書く機会があった。それらの論文に加えて，彼女は数冊の著書も刊行している。それらの著書には次のようなものがあった。すなわち，彼女の生い立ちや競技生活を書いたもの，[23] 陸上競技とそのトレーニング法について述べたものがある。[24][25] このうちの一冊の書は多分に木下東作博士の助力に与っていることは明らかであるが，その中でオリンピックの起源と歴史について述べ，古代オリンピックと近代オリンピックについて説明している。[26] この書は，他の記事・論文等とともに，当時日本国民が近代オリンピックの本質を理解しようとするとき，これに役だったのである。彼女は，そこで近代オリンピックの意義を次のように強調していた。すなわち，「何々国際会議，何々国際大会と現在の世界には大きな会合が，年に二つや三つ必ず世界主要な国国の代表によって世界人類の平和と親睦の為に行われて居るが，ここに一つ近世万国オリンピック大会位主要な使命と功績をのこしているものはほかにはない」[27] と。こ

うした近代オリンピックについての正しい理解を行い，これを宣伝・普及したことは，近代オリンピックについての書物がそもそも少なかった日本ではやはりこの国のオリンピック・ムーブメントの発展に対して大きく寄与したものといわなければならない。

（4） オリンピズムを追求する女性

人見絹枝は，アマチュアリズムに忠実であろうとした。そのため，自らのトレーニングを続けるとともに，新聞記者としての自分の仕事を立派に果たす努力をしたのである。先に述べたようなオリンピックの理想の正しい理解とこのようなアマチュア精神とに基づいて，実際にはオリンピック大会に参加すること，オリンピック大会の宣伝をすること，この二つを通して，彼女は近代オリンピックの理想の実現に献身したのである。

彼女は「女子選手は全体的に発達しなければならない」という考えをもっていた。日本の女子陸上チームがプラハ（第3回世界女子競技大会）で振るわなかったとき，彼女は日本の女子選手がもっと精神的に強くならなければならないということを強い調子で語っていた。[28] また，彼女は日本人女性がその持っている可能性を十分に伸ばし，これを最高に発揮しなければならないと信じていた。「日本人女性」と日本人のところを強調していると受け取ると，彼女の信念は一見したところでは，あるいは極端な愛国主義者風のものと受け取られるかもしれないが，決してそうではない。彼女が求めたものは，今日「オリンピズム」という言葉で語られているところの普遍的な諸価値だったといわなければならない。なぜなら，この点に関連するものとして彼女は自著の中で次のように近代オリンピックの理想を説いているからである。すなわち，「1894年7月16日フランスのクーベルタンは，各国の代表を招いて，各国の国民の身体を育成し，精神を練り，各国民の間の親善と友宜を図るために，古代オリンピック競技大会のような，一つの大会を開催することの可否について会議を開いた」。[29] ここでは，第一にオリンピックの理想は道徳教育や体育と融合しようとする試みであるといわれるように，それはいわゆる全人的発達を目標としていることが明らかであり，第二にナショナリズムとインターナショナリズムという問題でいえば，これは明らかに彼女は近代オリンピックの目的の一つとして「各国民の間の親善と友宜を図る」ことを鮮明にしていたのである。

V. 結　　語

以上考察したように，日本のオリンピック・ムーブメントに対する人見絹枝の貢献は，次のように要約される。

(1) オリンピック競技大会を含め国際競技大会に参加し，そこで好成績をおさめたことは，

当時の日本女性，とくに女子学生のスポーツ参加に対する大きな励ましとなったものである。当時，大会期間中は連日彼女の参加の様子が新聞などで報道され，それが広く一般的に女子学生たちのスポーツに対する関心を高め，女子のもつ身体的・精神的可能性に目を開かせ，その結果，若い女子選手の数が増加し，その中から国際選手となって活躍するような後継者が生まれてきたからである。彼女は日本人，とくに女性に対して，日本の女性は身体的な能力も含めた，その能力に自信を持たなくてはならないということを教えた。女性は全体的に発達しなければならないという彼女の理想と彼女自身による新しい女性観の提示は，日本人女性が国際オリンピック競技大会に参加する道を開いたのである。

この場合，国際女子オリンピック競技大会や日本女子オリンピック大会といった国際オリンピック競技大会以外の，いわゆるオリンピック大会と称するものにも積極的に参加していったことは，当時のおおかたの日本人には「オリンピック」という呼称の独占的使用ということについては，ほとんど理解が及ばなかったのである。こうした段階においては，彼女のさまざまないわゆるオリンピック大会への参加は，スポーツへの関心を高め，ひいては国際オリンピック競技大会の理解にも大きく役だったものと思われる。

(2) 彼女は国際オリンピック競技大会や国際女子オリンピック（万国女子オリンピック）大会についての講演をしたり，また第三回世界女子競技大会（万国女子オリンピック）の参加費用調達のための募金活動をしたり，さらには日本人女子選手の合宿をはじめて計画・実行し，そこで後進の指導を行い，実際に世界女子競技大会などの国際競技大会に一緒に出場した際にはそれらの後輩選手を世話をしたことは，女子スポーツ界（直接には女子陸上界）のリーダーとして日本の女子スポーツの発展に大きく寄与し，ひいてはその一般的レベル・アップの基盤の上に，その後の多数の女子選手の国際オリンピック競技大会参加を実現させたのである。

(3) 彼女はスポーツのトレーニングや競技会に関する著書を多数著しているが，それらの多くは女子陸上競技の技術に関する知識の啓蒙であり，また彼女自身の競技会での活躍の報告であった。それらは女子陸上競技に対する一般的な関心を高め，知識の向上に役立ったのである。これによって後輩が練習の方法を習得し，技術のレベル・アップにつながったのである。その意味においてそれらの著書が間接的にオリンピック・ムーブメントの発展に関わったと言えるが，さらにその中の一書は近代オリンピックの歴史について叙述し，オリンピックの理想の理解と普及について日本人読者を啓蒙するものとして重要な意義を持つものであったと見られる。

(4) 彼女は新聞記者という職業を持ちながらスポーツ選手としての練習を行うという，いわばアマチュア精神に立脚しつつオリンピックの精神の実現に努力した。そこでは，全人としての発達を理想としていたのであり，当時にあってそうした新しい女性像を追求した点に彼女の

オリンピック・ムーブメントに対する貢献が評価されるのである。

たしかに，彼女の生涯は非常に短かったが，その間の凝集された奮闘的努力は日本のオリンピック・ムーブメントの発展に対して極めて大きな貢献を行ったものであり，その業績は長く伝えられなければならないものである。

注 (1) 木下秀明「スポーツの近代日本史」杏林書院，1970年，189頁。
(2) 日本体育協会編「スポーツ八十年」日本体育協会，1958年，152頁。
(3) 日本体育協会編「オリンピックと日本スポーツ史」日本体育協会，1952年，21頁。
(4) 鈴木良徳・川本信正「オリンピック史」日本出版共同，1952年，199-200頁。
(5) 織田幹雄「改訂増補　陸上競技五十年」時事通信社，1970年，603-605頁。
(6) 女性体育史研究会編「近代日本女性体育史」—女性体育のパイオニアたち—(執筆者　萩原美代子：女性スポーツのパイオニア—人見絹枝）日本体育社，1981年，177-195頁。
(7) The International Olympic Academy, 'Report of the Fifteenth Session of the International Olympic Academy at Olympia', The Hellenic Olympic Committee, 1976, p. 286.
(8) 人見絹枝「スパイクの跡」平凡社，1929年参照。
(9) 人見，同前，100-171頁。日本陸上競技連盟編「日本陸上競技史」日本体育社，1956年，194-195頁。
(10) 人見，同前，346-371頁。大日本体育協会編「第9回オリンピック競技大会報告書」大日本体育協会，1930年，10頁。
(11) 人見絹枝「ゴールに入る」一成社，1931年，14-20頁。
(12) 人見，同前，127-169頁。日本陸上競技連盟編，前掲書，197-198頁。
(13) 大阪毎日新聞，昭和6年8月3日。東京朝日新聞，昭和6年8月3日。
(14) 東京朝日新聞，昭和6年8月5日，投書「人見嬢の死」。大阪毎日新聞，昭和6年8月4日，社説「人見嬢を悼む」。
(15) The International Academy, op. cit., p. 286.
(16) Segrave, Jeffrek O., 'Toward a Definition of Olymmpism' in: Segrave. J. O. and Chu, Donald (ed.), 'The Olympic Games in Transition', Human Kinetics, 1988, p. 151.
(17) 日本体育協会編「日本体育協会五十年史」日本体育協会，284-285頁。
人見は，「男子のみが世の中にたって戦ひつづけるのとちがふ私等も戦ふ時代だ。強き意志，頑健な肉体，崇高な人情美，フェヤーな精神に対する憧憬も世の人として立つに必要な全ての要素は皆スポーツによって築かれて行く」(「女子スポーツを語る」人文書房，1931年，2頁。)
(18) 大阪毎日新聞，自大正14年1月1日—至昭和6年12月31日参照。
(19) 大日本体育協会，「オリンピック」競技会なる名称に就て，「アスレチックス」大正15年4月号，2-3頁。
(20) 人見「ゴールに入る」前出，20-24頁。
(21) 日本体育協会編「日本体育協会五十年史」前出，284頁。
(22) 人見「ゴールに入る」前出，45-56頁。
(23) 同前「スパイクの跡」前出。同前「ゴールに入る」前出。
(24) 同前「最新女子陸上競技法」文展堂，1926年。
(25) 同前「戦うまで」三省堂，1929年。
(26) 同前「女子スポーツを語る」前出。
(27) 同前「戦うまで」前出，161頁。
(28) 同前「ゴールに入る」179-181頁。
(29) 同前「戦うまで」171頁。

〔追　記〕 本研究は1989年6月ギリシャ・オリンピアにおいて開かれた国際体育スポーツ史学会において筆者が行った研究報告 "Kinue Hitomi and the Development of the Olympic Games" に加筆・修正を施したものである。